

日本の民主思想が実現した J. デューイの東京帝国大学講演

笠 松 幸 一

はじめに

本論文では、新渡戸稲造、渋沢栄一、吉野作蔵に注目し、これらの人たちが実現したデューイ (John Dewey) の「東京帝国大学講演」(1919年)の意義を把握しよう。新渡戸稲造、渋沢栄一、吉野作造は、いかなる思想において、デューイの来日を迎えデューイの東京帝国大学講演を実現したのか。

デューイは、彼の東京帝国大学講演を著した『哲学の改造』(*Reconstruction in Philosophy*, 1920)の「はしがき」において、「東京帝国大学哲学科の各位」、「小野博士」、「新渡戸博士」にたいして謝辞を述べている。しかし、これらの人たち以外にも、渋沢栄一、吉野作造がデューイ講演の実現に深く関わったことを等閑に付してはならない。デューイの東京帝国大学講演を実現した意義が見失われてしまうからである。

本稿が、渋沢栄一と吉野作造を視野に入れてデューイの東京帝国大学講演に接近する理由は、以下の三点を筆者なりに確認したことに基づいている。

- (A) 「吉野作造日記」(『吉野作造選集』第14巻)のなかに(1918年2月9日〔土〕、「亜米利加講座」(アメリカ講座)(—デューイの東京帝国大学講演を迎える準備となったと見て取れる—)の開講式とともに、そこに吉野作造、新渡戸稲造、渋沢栄一の会合を認めた。
- (B) 「吉野作造日記」(同上)のなかに(1919年2月25日〔火〕、2月28日〔金〕)、吉野がデューイの東京帝国大学講演に参加していたことを認めた。
- (C) デューイの論文 *Liberalism in Japan* (日本の自由主義)のなかに、吉野作造が創設した民本主義団体である The Dawn (黎明会)についての説明を認めた。

従来、渋沢栄一および吉野作造とデューイの東京帝国大学講演との関係については、殆ど論じられることがなかった。そこで特にこの関係に着目しアプローチしてみよう。

本稿においては、まず、デューイの東京帝国大学講演に至る経緯とともに、その講演の大要を捉える。次に、新渡戸稲造の平民道が、渋沢栄一の帰一思想が、吉野作造の民本主義が、すなわち日本の民主思想が、デューイのデモクラシー論に共鳴し彼の東京帝国大学講演を実現したことを明らかにしたい。

I デューイの東京帝国大学講演

先ずは、デューイ来日時状況とともにデューイを迎えた人たちを把握しよう。次に、デューイ講演におけるドイツ哲学批判、それを通して提示されるデューイ・デモクラシーを理解しよう。(以後、「デューイの東京帝国大学講演」を「デューイ講演」と略記する。)

デューイは、アリス夫人 (Alice Chipman Dewey) とともに、1919年1月22日、日本船「春洋丸」にてサンフランシスコを出港し、同年2月9日、横浜港に到着した。日本におけるデューイの重要な仕事は、東京帝国大学における講演であった。その演題は、*Problems of Philosophic Reconstruction* (哲学改造の諸問題) である。この講演は、翌年の1920年、*Reconstruction in Philosophy* (哲学の改造) と改題されて、アメリカ、ヘンリー・ホルト社 (Henry Holt and Co.) から出版された。*Reconstruction in Philosophy* は、『哲学の改造』(清水幾太郎・清水禮子訳)として、1968年、出版された。

さて、この『哲学の改造』の「はしがき」において、デューイは以下のように謝辞を述べている。「東京帝国大学哲学科の各位、友人小野博士および新渡戸博士のご好意並びにご援助に対する私の消えることない感銘を記録する」¹⁾。

まず「東京帝国大学哲学科の各位」であるが、この各位を捉えておこう。横浜港に到着した「春洋丸」に入船し船内にてデューイ夫妻を迎えた二人の教授が挙げられなければならない。すなわち、姉崎正治 (東京帝国大学哲学科教授、宗教学)、友枝高彦 (東京高等師範学校教授・東京帝国大学助教授〔兼任〕、倫理学) である²⁾。さらに、デューイ夫妻は桑木巖翼 (東京帝国大学哲学科教授、哲学) の案内で歌舞伎を楽しんだので、桑木巖翼も加わることになる。なお、桑木は、1926年、ハーバード大学で開催される第6回国際哲学会において、デューイと再会し挨拶を交わしデューイの講演に参加している³⁾。

次に、「友人小野博士」である。小野博士とは小野栄二郎 (日本興業銀行副総裁) であり、彼も姉崎正治や友枝高彦とともに入船しデューイを迎えている。小野栄二郎は、ミシガン大学留学中にデューイの知遇を得て、帰国して同志社政法学校教授・教頭 (兼任) に就任 (1891年) し、やがては渋沢栄一が要職を務める日本興業銀行に入行し、ニューヨークやロンドンの支店勤務を経て、副総裁 (1913年)、総裁 (1923年) に就任した経済人である。小野はデューイの日本滞在に要する経済支援を渋沢栄一に要請し、渋沢はこれを承諾した。ちなみに、小野栄二郎は、オノ・ヨーコ (故ジョン・レノン〔ビートルズのメンバー〕の妻) の祖父である。

さて「新渡戸博士」である。デューイ夫妻は来日当初、一週間ほど帝国ホテルに宿泊し、その後は新

1) John Dewey, *Reconstruction in Philosophy* (1920), The Middle Works of John Dewey, Carbondale: Southern Illinois University Press (以後は、MWと略記する), Vol.12, Prefatory Note. (ジョン・デューウィ『哲学の改造』、清水幾太郎・清水禮子訳、岩波文庫、1968年、5ページ)

2) 東京朝日新聞、大正8年(1919年)、2月10日、G. ダイキューゼン『ジョン・デューイの生涯と思想』、三浦典郎・石田理訳、清水弘文堂、1977年、第十章、参照。

3) 桑木巖翼『日本哲学の黎明期』、書肆心水、2008年、188-189ページ、参照。

渡戸稲造（東京女子大学学長，元東京帝国大学法科大学教授）宅に滞在した。新渡戸稲造は *Bushido, The Soul of Japan* (1899) を著して、日本文化や日本人の行動様式を世界に紹介した国際的著名人であった。しかし、デューイ来日の頃は武士道の新渡戸ではなく、平和の民の道を唱道する「平民道」の新渡戸であった。

ここで、以上のデューイを迎えた人たちの思想を捉えておこう。姉崎正治、桑木巖翼、新渡戸稲造は、吉野作造が創設した大正デモクラシーの推進団体である「黎明会」の会員である。また彼らは、渋沢栄一が指導する「帰一協会」の会員でもある。したがって、黎明会、帰一協会の会員たちがデューイ講演を実現した、と把握できる。

とりわけ、新渡戸稲造は、デューイと個人的に親交があり、東京帝国大学法科大学において吉野作造と同僚（1918年迄）であり、渋沢栄一が設立する「日米関係委員会」の有力会員でもある。このような豊富な人的ネットワークの故に、新渡戸稲造はデューイ講演の実現に向けてのキーパーソンであると見て取れる。

さて、デューイの東京帝国大学講演の内容を捉えておこう。講演は、1919年2月25日（火）から同年3月21日（金）まで、毎週火曜日と金曜日、午後3時半から始められた。

デューイ講演の論旨は、結論的に言うと、古いタイプ（絶対的実在の把握を目指す合理的〔理性的〕認識の方法）を代表するドイツ観念論を、特にヘーゲルの国家論を批判の対象とする。その批判は、新しいタイプであるプラグマティズムの方法における、主として三つの連続性を論拠とする。すなわち、人間（生物）と状況（環境）の連続性、思考と行動（実験）の連続性、コミュニケーションと民主主義の連続性、である。

ヘーゲルは、国家および制度の目的は万人の自由の実現を促進することにある、と明瞭に主張したけれども、その結果は、プロイセン国家を神聖化し、官僚的絶対主義を神殿に祭ることであった⁴⁾。

ヘーゲルは、彼の歴史哲学において、絶対精神の本質は自由にあり、歴史とは精神が自由を自覚する弁証法的過程にある、と主張する。その自由の自覚はドイツ（プロイセン）の立憲君主政（制）において実現する、と宣揚する。しかし、デューイの把握によると、プロイセンの現状は万人の自由の実現とはほど遠い官僚的絶対主義の圧政なのである。その官僚的絶対主義は、ドイツ観念論の、とりわけヘーゲル弁証法哲学の根幹をなす「絶対精神」（*absoluter Geist*）の帰結である、とデューイは判断する。

さらに、デューイは、ヘーゲルが説き起こす「ドイツ政治哲学は法と国家を絶対的なものとした」⁵⁾ので、個人や集団や社会の自由と民主が制限される、と批判する。すなわち、ドイツ政治哲学は、「社会的諸問題の決定における個人の自由なる実験および選択力〔----〕社会の運営に参加する能力を、多

⁴⁾ John Dewey, *Reconstruction in Philosophy*, MW, Vol.12, pp.188-189. (邦訳、165ページ)。

⁵⁾ John Dewey, *Syllabus of Eight Lectures on Problems of Philosophic Reconstruction* (1919), MW, Vol.11, p.349.

くの人々に認めない」⁶⁾のである。

民主主義というのは、人間性が成長するところにあり、多くの男女が集団一大家族、会社、政府、教会、研究会などをつくる、その目的の決定に参加する場合にある。〔――〕この原則は、政治上の集団形成にもあてはまるし、産業、商業の集団形成にもあてはまる⁷⁾。

デューイによると、国家とは、恰もオーケストラの指揮者のようなものであり、「自らは演奏せず、演奏を通じて本質的に価値あることを行う人々の活動を調和させるオーケストラの指揮者の至上権」⁸⁾のように存立する。国家・国権をできるかぎり弱く、民主・民権をできるかぎり強く、というのがデューイのデモクラシーの趣旨である。

デューイが、彼の講演において、ドイツ哲学（ヘーゲル哲学）の国家主義的性格を批判し、民主主義（Democracy）の意義を聴衆に力説するとき、聴衆はそのデモクラシーの論旨に、ドイツ哲学否定・国家否定・君主（天皇）否定を感じ取り、ある種の抵抗感を覚えたであろうことは想像に難くない。というのは、日本はドイツ（プロイセン）を法と国家のモデルとして近代化を進めてきたからである。また、「忠君愛国」が国民道徳であったからである。デューイ講演は聴衆に感動を与えるものではなかった。

II 新渡戸稲造——武士道から「平民道」へ

デューイは、彼の著『哲学の改造』の「はしがき」において、新渡戸稲造に謝辞を述べるのであるが、新渡戸稲造はデューイといかなる関係にあったのであろうか。先ず、両者はジョンズ・ホプキンス大学の同窓であった。次に、思想的関係として、平民道（一武士道ではない）という新思想を掲げる新渡戸が、デューイのプラマティズムに、特にデモクラシー論と倫理・道徳論に関心を寄せていた。

デューイと新渡戸は、ジョンズ・ホプキンス大学にまつわるいくつかの接点がある。デューイは、ジョンズ・ホプキンス大学大学院に入学し「カントの心理学」により博士号を授与された（1882-1884）。新渡戸は、デューイが同大学大学院を修了した後に、ジョンズ・ホプキンス大学に入学し学んだ（1884-1887）。両者は同窓であるがキャンパスで出会うことはなかった。とはいえ、ジョンズ・ホプキンス大学のジルマン（Daniel Gilman）学長は、両者が在学した時の学長である。また、アダムズ（Herbert Adams）教授（歴史学・政治学）からは、デューイも新渡戸も親身な指導をうけた。ジルマン学長、アダムズ教授は、両者にとっては忘れえない敬愛する恩師であった⁹⁾。

さらに、新渡戸稲造は、アダムズ教授のゼミで、ジョン・デューイの兄、デービス・デューイ（Davis

⁶⁾ John Dewey, *Reconstruction in Philosophy*, MW, Vol.12, p.199. (邦訳, 181 ページ).

⁷⁾ *Ibid.*, pp.199-200. (邦訳, 181 ページ).

⁸⁾ *Ibid.*, p.196. (邦訳, 176 ページ).

⁹⁾ Cf. Paul Arthur Schilpp (editor), *The Philosophy of John Dewey*, Tudor Publishing Company, 1951, pp.15-16. ジョージ・オオシロ『新渡戸稲造 国際主義の開拓者』中央大学出版部, 2002年, 30 ページ, 参照.

Dewey)（一後に M. I. T の経済学・統計学の教授となる）と共に学び親交を持つことになった。デュービス・デューイを仲介して、ジョン・デューイと新渡戸稲造は、お互いを間接的に知ることになった。

時は流れて、新渡戸稲造は、カーネギー平和基金による日米交換教授として、デューイが勤務するコロンビア大学において、1911年11月中旬から12月中旬にかけて、「日本の教育」について講演を行った。デューイはその講演に参加し、その講演についての感想を新渡戸に述べた。こうして両者は出会い学的交流を進めることになった¹⁰⁾。

以上のような経緯から、デューイ夫妻は、来日の際、新渡戸夫妻と親しく交流し、日本の文化、歴史、社会、政治、等についての理解を深めることができた。デューイ夫妻は、帝国ホテルに宿泊した後は、中国に発つまで、新渡戸夫妻の邸宅で日本庭園から富士山を眺めながら快適に過ごした。新渡戸夫妻はキリスト教徒（クェーカー教徒）であり、夫人のメリー新渡戸（旧姓 Mary Elkinton [メリー・エルキントン]) はアメリカ人であった。

新渡戸稲造の前職は1918年まで東京帝国大学法科大学教授（1909-1918）であり、彼は吉野作造と同僚であった。新渡戸は、*Bushido, The Soul of Japan* (1899) を著した国際的著名人であったが、デューイ来日の頃、新渡戸は平民道という新しい思想を唱えながら、吉野作造とともに大正デモクラシーを推進する民本主義者であった。いつまでも武士道にとらわれていては時世に後れをとってしまう。このような焦燥からの思索を重ねて、彼は平民道の思想に辿りついた。

彼は、「武士道」における、武に対しては平和を、士に対しては民を、と強調しつつ、「平和の民の道」としての「平民道」を唱道する。

昔の如く「花は桜木、人は武士」と謳った時代は過ぎ去って、武士を理想あるいは標準とする道徳もこれまた時世後れであろう。それよりは民を根拠とし標準とし、これに重きを置いて政治も道徳も行う時代が今日まさに到来した、故に武に対して平和、士に対して民と、人の考えがモット広くかつ穏やかになりつつあることを察すれば、今後は武士道よりも平民道を主張するこそ時を得たものと思う¹¹⁾。

武士道は、もはや過去の時代に属する道徳であり、武士道は、もっと広い民衆に重きをおいて国民全体を包括する道としての、「平民道」に発展的に解消されることになる。平民道においてデモクラシーは可能となる、というのが新渡戸の信念である。

さて、新渡戸稲造のデモクラシー理解は、社会生活における倫理・道徳を中心に据えている。国際連盟が議論される世の中に照らしてみるに、「政治的民本主義が実施されるに先〔さきだ〕って道徳的といわんか、社会的といわんか、とにかく政治の根本義たる所にデモクラシーが行われて始めて政治にそ

¹⁰⁾ 同書、126ページ、参照。

¹¹⁾ 新渡戸稲造「平民道」、『実業之日本』第22巻第10号、1919年。鈴木範久編『新渡戸稲造論集』、岩波文庫、2007年、217-218ページ。

の実が挙げられるものと思う。モット平たく言えば民主思想あって始めて民本政治が現れる」¹²⁾。

平民道は、倫理・道徳的なものとして、つまり政治の根本義としてデモクラシーを主張する。そのデモクラシーの模範はアメリカにあり、というのが新渡戸の確信であった。

例えば礼儀作法、父子の関係、夫婦の間柄、政体の進化、その沿革を辿ると、進歩の方向は慥に米国式である。〔――〕新時代の相言葉として普く世界に唱道せらるる民主・民本説の如きは、その根元は、国々各々趣を異にするにしても、その運用に於いては米国を以って好例とするではないか¹³⁾。

人間の倫理・道徳的關係から政体の進化まで、その進展はアメリカ式に向かいつつある。デモクラシーの好例はアメリカに認められる。人間の平等、人格の承認、言論の尊重、等がデモクラシーの要諦であり、このアメリカのデモクラシーを平民道は模範とする。

人皆平等、随って相互の人格を認め、相互の説を尊重する習慣があったれば、今日米国のデモクラシーが淵源深く基礎が堅いと称するのである¹⁴⁾。

新渡戸稲造は、進歩の方向はアメリカにあり、民主・民本説の運用においてはアメリカを模範とする、と宣言する。最も自由な国、最もデモクラティックな国民は、最も幸福な国民になりえよう¹⁵⁾。新渡戸は、デモクラシーにおける倫理・道徳的なもの（平等、自由、人格、言論、等）を重視し、法律的な、政治的な制度としてのデモクラシーよりも、むしろ社会生活における倫理・道徳的なものの実践に、デモクラシーの意義を見出した。

Ⅲ 渋沢栄一の帰一思想および亜米利加講座

渋沢栄一の活動について、デューイ講演との関係から触れなければならない。渋沢栄一の日米交流史に果たした役割はきわめて重要である。

渋沢栄一は、大蔵省においては経済の国際化に備えて税制や幣制の改革を行った人であるが、官職を辞してからは、多くの民間企業を有する経営者となった。とはいえ、彼は単なる経済人ではなく、一言でいうと、民業（私企業）の自由な振興を促すリベラルな経済人であり、また私益に留ることのない公益の追求者であった。渋沢栄一の評伝『太平洋にける橋―渋沢栄一の生涯』（渋沢雅英、読売新聞社、1970年）が物語るように、彼は、日本とアメリカにおける経済、文化、学術、等の交流に尽力した。

12) 同書、221 ページ。

13) 新渡戸稲造「米国建国史要」、『新渡戸稲造全集』第三巻、教文館、1970年、20-21 ページ。

14) 新渡戸稲造「平民道」、『実業之日本』第22巻第10号。鈴木範久編『新渡戸稲造論集』、岩波文庫、222 ページ。

15) 新渡戸稲造「新自由主義」、『内観外望』、実業之日本社、1933年。鈴木範久編『新渡戸稲造論集』、岩波文庫、252 ページ、参照。

彼の「太平洋にかける橋」に寄せる志操は新渡戸稲造と同様なものがある。

デューイ講演との関係でいうと、渋沢栄一が設立した「帰一協会」（渋沢と姉崎正治が運営を担った）および「帰一思想」の運動に触れなければならない。渋沢栄一は成瀬仁蔵（日本女子大学校長）とともに帰一思想の強力な推進者であった。成瀬仁蔵は、W. ジェイムズ、デューイからプラグマティズムを学び、プラグマティズムを「主行主義」と訳出した人であり、日本におけるプラグマティズム研究の先駆者である。

渋沢栄一は、帰一協会の正式の設立（1912年6月20日）に先立つ第1回準備会（1912年4月11日）において、以下のような挨拶を述べている。

現今日本に於いては、諸種の宗教並びに道徳主義雑然として、人心の帰着に迷ふ事多し、吾人は如此状態に甘ずべきか、思想界の指導者は之に対して如何に考へらるるか、又東西両洋文明の関係も、単に国際の問題にあらずして、此の邊に関係なきか、本会合の趣旨は、この問題の研究にある¹⁶⁾。

つまり、渋沢は次のように提案する。今日の日本においては、諸種の宗教や道徳が雑然としてあり、人心は落ち着くところがない。したがって、人心の安定に向けて人心を帰着せしめるところの、何らかの精神的統一性が必要ではないか。この問題の解決に向けて宗教・道徳を、東西文明を視野に入れて研究しよう。

渋沢の協力者、成瀬仁蔵によると、帰一思想・運動とは、「異宗教、異人種、異国民の間に調和一致の点を発見し、之を培養し発展せしむること」¹⁷⁾を趣旨として、これにより紛争や戦争を回避し、世界平和の実現を目指す運動であった。つまり、帰一思想とは、世界的な諸宗教・道徳のなかに共通性を究明し、その共通性に帰着することにより、紛争や戦争を避ける道が開かれてくる、世界平和の道が開かれてくる、という思想である。戦争は、宗教の違い、人種の違い、国民の違いを、ことさらに強調することにより、国家の号令によって始められるのが常であるからである。

デューイは、成瀬が渋沢の支援を得て設立（1912年10月10日）した「アメリカ帰一協会」（Concordia Association in America）の発起幹事であり評議員を務めていた。このような事情から、またデューイ自身の学的関心（—日本における「民主主義と教育」の現状はいかにあるのか—）もあって、デューイは日本訪問の意欲をもったと推測される。成瀬仁蔵は、不運にもデューイ来日中に病により死去した。

渋沢栄一は、帰一思想・運動とともに、もう一つの事業を行った。それは、日本とアメリカの各界の指導者を招いて、日米の平和友好を目的として、日米間の諸問題について対話・議論を行う委員会、すなわち「日米関係委員会」の設立である（1916年）。彼は、新渡戸稲造、吉野作造、等の識者の意見を重用しながら、日本とアメリカにおける様々な交流事業を打ち出した。渋沢のデューイ来日に寄せる種々の支援もまた交流事業の一環であると見て取れる。

¹⁶⁾ 『帰一協会会報第一』、1913年、1ページ。

¹⁷⁾ 成瀬仁蔵著作集委員会編『成瀬仁蔵著作集』第3巻、日本女子大学、1981年、618ページ。

加えて言うと、渋沢栄一は、A.ヘボン（チェイス・マンハッタン銀行頭取）からのアメリカ講座開設とその基金提供の提案を受け入れた。こうして、彼はデューイ講演の前年、東京帝国大学に「アメリカ研究講座」（「米国憲法・歴史及外交」講座）を開設すべく努力した。このことは「吉野作造日記」の「渋沢男」からも裏付けられる（正しくは「渋沢男爵」であるが「爵」を省略している。「渋沢男」は他の日付にも記される）¹⁸⁾。

大正7年（1918年）2月9日（土）

午後亜米利加講座の開講式あり新渡戸先生講義せらる

右終りて総長室にて渋沢男始め数名の関係者会合して茶を飲む

このアメリカ研究講座においては、美濃部達吉がアメリカ憲法を、新渡戸稲造がアメリカ史を、吉野作造がアメリカ外交を、それぞれ担当した。この講座開設の翌年に、デューイが来日し東京帝国大学法科大学教室で講演をすることになる。従って、アメリカ研究講座は、東京帝国大学の教授たちや学生たちにアメリカ研究への学的関心を促し、デューイ講演を東京帝国大学で円滑に行うための準備となった。

当時の東京帝国大学は、明治憲法がドイツ（プロイセン）憲法を模範として成立したが故に、ドイツ哲学（特にカントからヘーゲルにいたる観念論）の研究がメイン・ストリームであった。その東京帝国大学に渋沢栄一はアメリカ研究講座を開設すべく尽力した。このことを考え合わせると、渋沢の日米学術交流に期する並々ならぬ意欲を窺い知ることができる。

ところで、成瀬仁蔵は、吉野作造が提唱する民本主義の賛同者であり、帰一思想・運動は民本主義に立脚することによって、日本、アメリカ、世界へと展開しうる、という信念のもとに、この帰一思想の発展に努めた。成瀬における民本主義の把握は以下のとおりである。

民本主義とは、国民の意志と其の永遠の福利〔幸福・利益〕とを顧み、之を善導し醇化しつつ、其の満足と実現とを計る政治である¹⁹⁾。

成瀬は、国民の福利（幸福・利益）の実現のために、民本主義を政治上の主張ないし運動として進めること、そのことが帰一思想・運動を進め広めることでもある、と考えた。したがって、帰一協会は、また帰一思想は、民本主義を中心とする大正デモクラシー運動の推進力ともなった。渋沢栄一にとって、デモクラシーとは彼の経済活動における民業の育成・振興を促し、公益という果実を産むことになる。つまりは、一般民衆の利益・幸福の実現に通じることであった。すなわち、民本主義は、渋沢の信条である「道德経済合一説」に適うのである。

¹⁸⁾ 吉野作造「日記 二」、松尾尊兌・三谷太一郎・飯田泰三編『吉野作造選集』第14巻、岩波書店、1996年、118ページ。

¹⁹⁾ 成瀬仁蔵著作集編集委員会編『成瀬仁蔵著作集』第3巻、日本女子大学、1981年、484ページ。

東京帝国大学の姉崎正治，桑木厳翼，新渡戸稲造は，帰一協会の有力会員であった。また，渋沢は，アメリカ研究講座の担当者，新渡戸稲造，吉野作造，美濃部達吉を通して，日米の学術交流を実現した。日本興業銀行副総裁小野栄二郎は，デューイ滞在に要する経済支援を渋沢に依頼した。渋沢は，日本興業銀行にたいしては設立委員・株主・監査役という親密な関係の故に，デューイの経済支援を了諾した。また，渋沢は，デューイが来日当初，1週間ほど滞在した帝国ホテルの取締役会長であった。

以上のようにして，渋沢栄一がデューイの日本滞在大および東京帝国大学講演に果たした役割は，まさしく「太平洋にかけの橋」として大なるものがある。

IV 吉野作造の民本主義とデューイ・デモクラシー

吉野作造の論文『憲政の本義を説いてその有終の美を済すの途を論ず』（『中央公論』，大正5年〔1916年〕，1月号，初出）は，民本主義を明示して大正デモクラシー運動の烽火となった。この論文には，一般民衆の幸福をめぐる，デューイと共有しえる観念を把握できる。この共通観念を確認しよう。吉野作造は，新渡戸稲造と同様に，アメリカの建国史およびデモクラシーに強い関心を寄せていた。

米国建設の初めをなす者は，〔----〕1620年9月，メー・フラワー号（五月の花号）に搭乗して英国の港プリマスを出帆したる，かの74人の男子および28人の婦人より成るいわゆるピルグリム・ファーザーズの一団である^{20）}。

吉野作造は彼の憲政論についてアメリカを好例として説き起こす，吉野が言うところの「憲政」とは何か。「憲政，すなわち立憲政治または憲法政治というのは，文字の示すとおり『憲法をもってする政治』，『憲法に遵拠して行ふところの政治』という意味である」^{21）}。この憲法政治を主旨とする精神・思想が民本主義である。吉野は，アメリカの立憲政治にたいして，つまりはデモクラシーにたいして，彼なりの憧憬をまじえながら高い評価を与えている。

北米合衆国は，いうまでもなく憲政の運用にもっともよく成功し，物質的方面においても精神的方面においても，今日，国運の興隆すこぶる目覚ましいものがある^{22）}。

さて，デューイが来日して，彼の講演が東京帝国大学法科大学33番教室で行われた。吉野作造の日記によると，吉野は，少なくとも，デューイの第1回講演（1919年2月25日〔火〕），第2回講演（同

^{20）} 吉野作造「憲政の本義を説いてその有終の美を済すの途を論ず」，三谷太一郎編『吉野作造』（日本の名著48），中央公論社（中公バックス），1984年，96ページ。

^{21）} 同書，98ページ。

^{22）} 同書，94ページ。

年2月28日〔金〕に出席した²³⁾。

この東京帝国大学法科大学が大正デモクラシーの発信基地であった。「東京帝国大学政治学科におけるある教授たちは、活動的な自由主義者であった」²⁴⁾とデューイは認識する。デューイは、彼の著 *Liberalism in Japan* (日本の自由主義) において、日本のデモクラシーに賛意を表して、大正デモクラシーを指導する東京帝国大学の当時の状況を以下のように把握する。

東京帝国大学は知的保守主義者のホームである、としばしば思われている。〔しかし〕その東京帝国大学における学生グループが『デモクラシー』(Democracy) と呼ばれるジャーナルを発行している。東京帝国大学における、ある教授たちは「黎明会」(The Dawn) の活動メンバーであり、黎明会はデモクラシーを公開講演により宣伝している²⁵⁾。

黎明会(1918年発足)とは、吉野作造が提唱する民本主義を研究するとともに、その実践普及を目指す団体である。同様の趣旨において、吉野の薫陶を受けて組織された学生グループが「新人会」であり、新人会は『デモクラシー』というリベラルな雑誌を刊行していた。デューイは、東京帝国大学が基地となり発信する大正デモクラシーに大いに注目した。

さて、同じデモクラシーといっても、デューイが主張するデモクラシーと吉野が主張するデモクラシーはその概念を異にする。デューイのデモクラシーは、独立宣言を基とするアメリカ共和政(制)を背景として、民主(人民)主権を謳う民主主義である。

一方、吉野作造のデモクラシーは、主権の帰属については、当時の時勢の故に、いわば括弧に入れて判断を中止するところのそれである。つまり、主権については、法理論上の議論をしないところの(一しえなかつたところの)デモクラシーとしての「民本主義」である。すなわち、民本主義は主権の帰属については判断を中止する(一せざるをえなかつたところの)デモクラシーである。この点を、吉野作造の陳述に確認しておこう。

いわゆる民本主義とは、法律の理論上主権の何人にありやということはにおいてこれを問わず、ただその主権を行用するにあつて、主権者はすべからく一般民衆の利福ならびに意向を重んずるを方針とすべしという主義である。すなわち国権の運用に関してその指導的標準となるべき政治主義であつて、主権の君主にありや人民にありやはこれを問うところではない²⁶⁾。

以上の陳述から民本主義の二つの根本主張を把握することができる。すなわち、第一に、君主主権か

23) 吉野作造「日記 二」, 松尾尊発・三谷太一郎・飯田泰三編『吉野作造選集』第14巻, 岩波書店, 118ページ。

24) John Dewey, *Public Opinion in Japan* (1921), MW, Vol.13, p.259.

25) John Dewey, *Liberalism in Japan* (1919), MW, Vol.11, p.165.

26) 吉野作造「憲政の本義を説いてその有終の美を済すの途を論ず」, 三谷太一郎編『吉野作造』(日本の名著48), 中央公論社(中公バックス), 117ページ。

人民主権かについてはこれを問わない。第二に、主権者は一般民衆の利福（利益・幸福）ならびに意向を重んずることを方針とする。第一は法律に関することであり、第二は政治に関することである。すなわち、民本主義とはあくまでも第二における政治主義ないし政治主張なのである。なぜなら、民本主義が第一の法律上の「主権の何人にありや」「主権の君主にありや人民にありや」という問題に関わると、主権論争を惹き起こし、権力による言論・思想弾圧を被る可能性、ひいては大逆罪に抵触する可能性があったからである。

吉野作造は君主主権か人民（民主）主権かについてはこれを問わない。吉野の認識でいうと、「自由思想に加えられる威圧のすこぶる強烈なるものありし」²⁷⁾ 時勢であった。吉野が認めるように、Democracy の訳語は民主主義であった。しかし、当時は、「民主主義」は危険思想視される時勢であったが故に、吉野は自らのデモクラシーを民本主義と称することにしたのである。

したがって、吉野の民本主義は論点をあくまでも政治上に置いて、主権の帰属を問うこと（「主権の何人にありや」「主権の君主にありや人民にありや」）なしに、主権者がその主権を行使する目的は、ひとえに人民の利福（利益・幸福）ならびに意向を重んずるためにある、という政治主義ないし政治主張を打ち出した。

デューイのデモクラシーと吉野のデモクラシー（民本主義）には微妙な差異がある。デューイ・デモクラシーの概念は、独立宣言を基とする人民（民主）主権を主張するデモクラシー、アメリカ共和政（制）デモクラシーである。一方、吉野作造のデモクラシーは、主権の帰属を問わないそれである。とはいえ、吉野作造とデューイは、主権の行用（運用）においては一般民衆の利福（利益・幸福）を目的とする、ということをお互いの共通の趣旨とする。この点においては、吉野の民本主義はデューイ・デモクラシーと通じ合う。

吉野の民本主義がデューイ・デモクラシーと通じ合う、ということは、平和や幸福を唱える新渡戸稲造の平民道も、渋沢栄一や成瀬仁蔵の帰一思想も、デューイ・デモクラシーと通じ合う、ということである。

デューイは、彼のデモクラシー論を説明するに際して、アメリカ独立宣言における人間の「平等」そして「生命、自由、および幸福を追求する権利」における、その幸福について以下のように説明する。

政府の唯一の正しい目的は、この政治のもとに結合する一般民衆にできうる限りの最大限の幸福を確保することにある²⁸⁾。

吉野作造は民本主義を以下のように定義する。「民本主義とは、一般民衆の利益・幸福並びにその意

²⁷⁾ 吉野作造「民本主義鼓舞時代の回顧」、三谷太郎編『吉野作造』（日本の名著 48）、217 ページ。

²⁸⁾ John Dewey, *Freedom and Culture* (1935), *The Later Works of John Dewey*, Carbondale: Southern Illinois University, Vol.13, p.179.

向に重きを置くという政権運用上の方針である」²⁹⁾。この定義において、民本主義における政治の目的が以下のように示される。「政権運用の目的すなわち『政治の目的』が一般民衆の利福（利益・幸福）にあるということである」³⁰⁾。

さて、吉野作造の民本主義とデューイ・デモクラシーにおいて、政治の目的とは以下のとおりである。
デューイ：政治の目的は一般民衆にできる限りの最大限の幸福を確保することにある。

吉野作造：政治の目的は一般民衆の利益・幸福にある。

すなわち、端的に言うと、「一般民衆の幸福を目的とする政治」が、吉野作造の民本主義とデューイ・デモクラシーに共通する観念である。とはいえ、この観念は、吉野とデューイに限られる共通観念ではない。「一般民衆の幸福を目的とする政治」は、既述したように、吉野の民本主義と協調する新渡戸稲造の平民道、渋沢栄一の帰一思想にも通底する観念である。それ故に、「一般民衆の幸福を目的とする政治」という、日本の民主思想（平民道、帰一思想、民本主義）が、デューイの東京帝国大学講演を実現するに至ったのである。

結語

新渡戸稲造の平民道、渋沢栄一の帰一思想、吉野作造の民本主義、デューイ・デモクラシー、そこには「一般民衆の幸福を目的とする政治」という実践的理念が、その濃淡はあるものの、共有されている。特に、吉野作造の民本主義とデューイ・デモクラシーとの間にはこの理念が濃密である。この理念が推進力となって、デューイの東京帝国大学講演が実現した。さてデューイ講演の意義を以下の三つの箇条にまとめて結びとしよう。

- (A) デューイ講演の実現には、日本人の自発的な主体的な民主思想（平民道・帰一思想・民本主義）の実践が認められる。
- (B) この民主思想は、第2次世界大戦の戦前・戦中における言論（思想）統制の渦中にあっても、絶えることなく伏流し、戦後、国民主権を旨とする新憲法の成立とともに顕現し、今日の民主主義に流れ来ている。
- (C) 日本の戦後の民主主義は、この民主思想が主導したデューイ講演の実現に予示されている。

すなわち、新渡戸稲造、渋沢栄一、吉野作造、デューイが実現したデューイ講演は、日本における民主主義の源流となっている。

²⁹⁾ 吉野作造「憲政の本義を説いてその有終の美を済すの途を論ず」、三谷太一郎編『吉野作造』（日本の名著48）、121ページ。

³⁰⁾ 同書、同ページ。

（吉野作造とデューイの親交を表わすエピソードを補足しておきたい。デューイは、日本から中国に渡り滞り、アメリカに帰国の際、日本に立ち寄った〔1921年8月下旬〕。その折に、吉野作造に会い、彼の著書 *Creative Intelligence*〔創造的知性〕を吉野に進呈した〔日本デューイ学会編『デューイ研究—デューイ来日50周年記念論文集』、玉川大学出版部、1969年〕。なお、新渡戸稲造は国際連盟事務局次長を務めており、デューイに会えなかったものと推察される。）

付記

本稿は「吉野作造研究会」（代表 竹中英俊）の講演会（2012年7月14日，アルカディア市ヶ谷）における発表原稿「太平洋の懸け橋：吉野作造と J. デューイ」を発展させたものである。

参考文献

- 上田正昭ほか監修（2001）『講談社 日本人名大辞典』講談社。
渋沢栄一記念財団編（2012）『渋沢栄一を知る辞典』東京堂出版。
日本デューイ学会編（2010）『日本のデューイ研究と 21 世紀の課題—日本デューイ学会設立 50 周年記念論集』世界思想社。
三谷太一郎（2007）『新版 大正デモクラシー論 吉野作造の時代』東京大学出版会。